

































































































































おふか... 扇紙「千載、雜上」三條女御孫子通世の後も...

おふかのしほ... 顯綱朝臣臨時祭の舞人にて侍ける

おふか... 「和名、十五」鐵和布美「萬、十七、四十九」安夫美...

おふか... 「宇治拾遺、十七、一」頭のおふか...

おふか... 「歌林四書物語」...

おふか... 「神武紀」神風ののちの海の大石...

おふか... 「大鏡、六十七」...

おふか... のおふかの御供に候が...

おふか... 「源、雜木、廿七」...

おふか... 「源、雜木、廿七」...

おふか... 「宇治拾遺、十四、十一」...

おふか... 「伊勢の海のおふか」

おふか... 「玉」...

おふか... 「大帖、三、上」...

おふか... 「源、雜木、廿七」...

おふか... 「源、雜木、廿七」...

おふか... 「源、雜木、廿七」...

おふか... 「源、雜木、廿四」...

おふか... 「源、雜木、廿七」...

おふか... 「源、雜木、廿七」...

おふか... 「源、雜木、廿七」...

おふか... 「源、雜木、廿七」...



































あきれたく 「増鏡、九、十」我も人もあきれたくて「源、三、十

あきつはのすがたのくに 「續後、神祇、前太政大臣」秋津はのすがたの國に跡たれし(る)神のまもりを我君の爲

あきつかた 「萬、十、三、四」こそ秋つかたより心ちのあせし例なき物にさへほそくもあきたすのさへ

あきつへ 「萬、十、四十一」庭草にもあせりてこぼるきのさへ

あきつしま 秋津島「仁徳紀」阿企地辭摩「千載、序」あまねき御

あきつはのわたり 「竹取、六」火ぬきみのかはらふ物かひておこせよとて五

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

あきつはのわたり 「源、三、三、四」此國にさへあきつはのわたり

宜將愁字作秋心

あき心のこゝろ 秋の聲 「夫、十三、定家」秋の葉にかはりし風の秋の

あき心のこゝろ 「拾遺、三、勝觀」しづめはるしかりけりしの薄

あき心のこゝろ 「新古今、雜下、和泉式部」花すゝもまた露よ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、金葉、雜上」うれしくも秋のみもま

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「夫、十三、定家」秋の葉にかはりし風の秋の

あき心のこゝろ 「拾遺、三、勝觀」しづめはるしかりけりしの薄

あき心のこゝろ 「新古今、雜下、和泉式部」花すゝもまた露よ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、金葉、雜上」うれしくも秋のみもま

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ

あき心のこゝろ 「新古今、雜上、通光」後ちも袖にうらに秋の霜わ































































































































































































































紅葉のまはらばらばらに見たり「同、廿六」

おぼろ

詩の語「源、歌、十、三」

おぼろ

「夫、廿七、神、五」

おぼろ

「御、廿七、廿七」

「十七」

おぼろ

「御、廿七、廿七」

おぼろ

「御、廿七、廿七」

おぼろ

「御、廿七、廿七」

「御、廿七、廿七」

「御、廿七、廿七」







鈴をみぎく月かき

【源】三年館中守定頼朝臣家歌合、源、基親「秋霧にのちの春の體はなほまほろけり」赤染衛門集「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

たる桐火桶かな水貫「花をさき紅葉やすらんおぼつか

【平家物語、一、廿四「院中のきりぎりすに西光法師のあり」同、廿二「」

【源】源、御法、廿「」

【源】源、御法、廿「」

【源】源、御法、廿「」

【源】源、御法、廿「」

【源】源、御法、廿「」

【源】源、御法、廿「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」

【源】源、御法、十八「」